



世界軍備趨勢の轉機
(奉天會戰の紀念日稿)

特別
又6
8490
1860
早稲田大学図書館



世界軍備趨勢の轉機(奉天會戰の紀念日稿)

某軍事通

一 製艦競争の由来と現状

第十九世紀の末葉より第二世紀の初頭を亘りては、列國
軍備の焦點は海軍擴張、製艦競争に向けられ、之れが為痛
く列國の財政を攪亂し、國民の負擔を重からしめ、學術工
藝の粹を奪けて、人生の幸福國民の安寧を破壊すべき機
関の製造を適用せしむるが如き趨向を馴致したのは、誠と
人道上の痛恨事であると謂はねばならぬ、抑も千八百七十年

普佛戦争後、獨逸の増兵的挑発に應じて、歐洲大陸に勃
興したりし、彼の陸軍競争は、一新轉機を興へて、若干
此の趨勢を緩和せしめて、更に製艦競争の新傾向を誘
起した動力製造の本尊も、誰あらず矢張り音なき高き
獨逸のカイゼルであつた、彼は普佛戦争後二十餘年間、
斯なき陸上軍備の擴張改善と、獨逸伊三國同盟の鞏固
とに依りて、殆ど佛露同盟を威壓して、歐洲中原に霸
を唱ふるに足るの地位を占むるに至りた、加ふるに勤勉して
精力絶倫なる獨逸國民の殖産工業上に於ける著大なる

發展と、年々増殖する其の人口の始末は、彼をして終に
發展を南北米大陸を始めとして、南、東、亞、非、利、加、近、東、及
極東に至るまで求むるに至らしめた、併しなや、彼の進ま
んと欲する地域の多くは、英國國民に優先權を占有せら
れ、其の利權を殆んど壟斷せられて居る實況である、獨
逸國民が此の間を割り込むで相當の地位を獲得する為
には必ずや英國との利害衝突は、早晚免かぬ難き自然
の形勢であつた、その中で彼は、教世紀を通じて對二強國
海軍を標準として海上武力を整備し、海上王を以て

自任して居る英國の此の勢力を挫くの必要を深く感
した。此の希望を實現する為に採りたる彼が計畫の、其
の鋒鏑を現はし始めたのは、莫子千八百九十八年である。爾
來着々として心算なく真相を露し、進んで止まざるの
意氣心を示すに至りた。此の氣勢は、第一に驚動せら
れたる者は、無論英國である、何んとなんとは、獨逸海軍
の衝天の勢を以てする發達は、海外殖民地に於ける英
國利権の退縮などの小問題には濟まぬ、結局大英帝
國の興亡に關する根本問題に接觸するに至りた。そ

ちで英國官民朝野を擧りて海上難を叫び、獨りて對して
も従来の二強標準主義を絶対に保持するの覺悟を定め
て、對獨製艦競争を開始するに至りた。カイゼルの採りし
海軍擴張策の影響を蒙りたのは、單に英國のみならず、露
も然りして、消極的ならんも沿岸防備の必要ありしと、露
併の如きは、直ちに其の御相伴を為さぬは存りぬ。目下
偏りたのである。隣り近所の御交際はまだしもてあるが、
遠き南北米大陸民までも年々移住し來る獨逸國民
の卓拔ある精力を企業心は、到底自國藥籠中のものぞ

なすふとは困難にして延びてモンロー主義の危くせらるるの日あるを 惧き就中合衆國の如きは、偉大なる海軍政策を採るに至りた、其の餘味は迷惑あから極東を飛来して、今日我邦一部の人士をして海上難を暗導せしむるに至りた、斯の如き最近十数年来に於ける列國製艦競争の實況は恰も國民の汗と財囊を絞つて造船業者の金庫を奉納せしめて居るかの如き觀を呈して居る、實に其十九世紀の中葉に於て、歐洲中原に陸軍競争の序幕を開きた處の獨逸は、其二十世紀の

初頭を於ては既に一轉して海上競争の導火線となり、今や更に再轉して陸上新競争の先達となりんとするの傾がある、何んと云ふとも彼の活動的精力は感服するの外はない、

二、製艦競争の緩和と獨逸の陸軍大擴張

獨逸カイゼルが英國海軍と拮抗すべき大艦隊を建設して、一挙海上王を屈服せしめんとするの大野心は、當の敵たる英國は勿論の如き、其の他の列國をも震慑せしめ、其の結果として現時に於ける製艦大競争の氣運を挑

發した、此の學たる快は確に快たるを失はざりしは
雖、彼も亦なるもの、恐らく此の氣運の斷ず所の將來の結
果は、原して彼が國民の為幸か不幸か不孰と、深く思を致
したであらう、然り聰明穎悟にして機を見るに敏なる
彼れカイセルは十數年來其の採り来りた政策が、國民の
發展は抵抗力のなき、経路を進めて進むべき、歴史的の
法則に反して、最後の抵抗を有せる英國海軍を前途
に控へたる至難の経路を擇ひたるの非を悟りた、獨逸國
氏の精力は、其の奮闘に依りて、終には此の如き、難路を

も排して、甚奮進し得るの見込なきにあらざらざるも、之
れが為る彼の臣子が排すべき、財政上の犠牲を列國より蒙
るべき、嫉視は、到底容易に彼國民に海外發展よりして
之を償ふて尚餘りあるの利益を得せしむる事とは至難で
ある、所謂得失相償ひ難き、迂策たりし、之を感知した、
折柄先年「モロッコ」問題紛争に際し、多年露併同盟に
對して十分威壓力を有すを確信していた、三國同盟の
武力上も亦あからざる弱點を曝露して遂に香ばし
からざる條件の下に該問題の解決を見るに至りた、殊に最

近き於ける巴南幹事件の経過は、三國同盟中子於ても
伊國の深く頼み難きと、獨塊聯合の實力は、到底露
併同盟子對して、十分重きを感せしめるおとの難きを深
く悟りた様子である、之子加ふるよ巴南幹子於ける勢力
の推移は、一面子於ては英吉利の同問題子對する執著
熱心は、千八百七十七年露土戦争後のものに比すは、近
年大に冷却せざるを認知し得るよ至りたのと、他面子於ては
巴南幹小邦の意外の成功は、漸次彼等の勢力を増長せ
しめ、遂つて逐來南方子對して、重き懸念を拂はせりし

塊國をして、多くの顧慮を此の方面子向はしむるの必要
を感せしむるに至りた、其の結果として獨逸の東西子對
する戦争子於て多く塊國の協力を頼み難き、の新形勢力
子違着するに至りた、斯の如く近く露佛子對する均勢力
も、疑問とありし現状子降し遠き海外發展の爲、永く
英吉利と製艦競争を繼續するのは、所謂二兎を追ふ也
の一兎をも失ふの愚子陥るを感し、^{得ず}、~~た~~、~~を~~、~~あ~~、~~て~~、~~茲~~、~~西~~、~~三~~、~~年~~
未屢、英國側より德意勸誘せらるるも、常子之を
拒絶して相談子棄つたり、英十六對、獨十標準の製

艦隊協主義を近く突然承認するに至りた、英國側では各協成立を以て、自國の一大成功でもあるかの様子を考へて来る者も少くあつた、免し奥に彼が多年固持し来りしニ強權主義は全然破壊せらるる點のみより見ても確し英の一大讓歩であるとはねばあらぬ、況んや企圖心ヲ富めるカイゼル決して現状維持を甘心するものであつた、彼は直ちに英獨協に依りて節制を得た、否夫を以て上の資力を投じて更に一大陸軍の擴張を計畫し、近く其の意圖を發表して將に歐洲中原を震駭せしめつ

つある、獨逸の陸軍大擴張は云ふまでもなく、直接の目的は、露佛同盟に對して優勢維持と、巴爾幹に發生した新現象に應ずる爲に外あらぬと認むべきである、併し此の大擴張が成立の暁は、單に歐洲中原に於ける均勢破壊のみならず、其の影響は世界の各方面に波及して、折角英獨製艦隊に依りて海上競争緩和の喜ぶべき光明を認むる代り、再轉して陸上武力の一大競争を惹起すべき萌芽は今やカイゼルに依りて再び播種せしめたと云ふて宜しむ、獨逸の大擴張が世界の各方面

面を淡り如何なる反響を起しつあるやを講究する
に先つて、聊か該計画の内容を就き付度して見よう。

三、獨逸陸軍大擴張の内容

獨逸陸軍擴張の具體的成案は、伯林官邊の堅き秘密の
鍵未だ開かざるを以て、之を確知するとは出来
ぬ、又た西電傳ふる處も、多くは断片的のものであるけ
れ、此等を綜合判断し、且之を現時に於ける獨逸軍
事の真相を照合するときは、畧々擴張案の内容を付
度する處から出来ぬを以て、今日まで接手した報道

に依りて見れば、此の擴張を要する一時費は大約五
億圓で、将来毎年支出すべき經常費は一億二千万
圓にあり、是とは確である、如何に国力充實せる獨逸國
民にも此の巨大なる新負擔の増加を就ては、若干反對
論の惹起すへきは勿論のことと豫期して居るにせよ、今
日まで到達したる西電より信ずべくんば、常に排軍
事主義を標榜して居る、社會黨内を於ては、有力な
る反對の声を放たずして、一部の商業界を於て、多
くの議論があるのみであるとは獨逸國民の自覺と決

意も想像さきて、何となく床敷心地かするではふいふ却
説此の巨億の財を投じて企画せる者は、如何なる形式
を以て頭を来るかは、實に見物に價する。獨逸は多
年採り来りし所の、常備兵数は人口の百分一を以て標
準とするとの主義を變更せざる限りは、彼等は年々壯
丁に於て尚六万有餘の徵集過剩を存して居る。斯の如
く軍事未教育の壯丁を存すると云ふとは、國民皆兵
主義の絶對的發揮を以て、理想として且之を誇りとせる。
獨逸國民には遺憾とせる所である。故に彼は此の過剩の

全部を拵けて召募し、軍事教育を施すとは今度
は必ず事實として現はるるであらう。年々徵集し得る
壯丁六万有餘と云へば、旅団十一二師團(五六軍團)は擴張し
得る、之を以上の兵員増加は人口百分一主義を變更し
ば実施不可能である。而して此の擴張は當りて、在来のもの
同一編制の軍團(師團)を新設すべきや、或は今日まで兵學界に
於て、有力な唱導せらるるありし所の現在師團内に於ける
旅團數及び旅團内に於ける聯隊數を増加して、何れも三
個とする用兵上の理想説を實現するに至るやは疑問である。

何きの形式を以て現はるるとも偉大の擴張たるを失はぬ、
係し夫き丈けの擴張のみでは、未だ前子述へた丈けの巨
額ある一時費も經常費も要せぬ譯で、此の外子尚企
画して居る事とは、澤山あると想像せねばならぬ、獨逸軍
現時の真相より打算して、之を村度列擧して見れば、
上子述へたる外子
概ね次の如きものである、

一、現時三十有餘の歩兵聯隊は、まだ二大隊編制である、又
右歩兵聯隊の内には、機關銃中隊を有せぬ者がある、
であるから歩兵聯隊の全部を三大隊とあり、各聯

隊子悉く機關銃中隊を附屬するに至るは疑なき事と
である、

二、騎砲兵の編制改正及野戰輕榴彈砲の砲数を増加して今
や優勢何れかとの疑問の頂點にある西隣豫想敵國の
砲兵子對して、優勢を占めんと勉むる事と、

三、獨逸の飛行艇は近來其の遠航子依り痛く英島國
民の心膽を寒からしむるか如き、好境子進みつつある、
此の進運を利用して將來事業の大成を圖るべきは
勿論の事とあるが、飛行艇子關しては、併國子對し

尚大に遜色あるの景況であるから、此の非なる形勢を
一変して、たとふも併國に匹敵し得るの發展を切望
して居る。故に今度の擴張は飛行船及飛行機所
謂航空部隊の増設が、亦た須要なる部分を占むる事
は確に豫言し得るのである。

其他國境に在る軍隊の定員を増加して、有事の日急
速に敵國へ侵入し得るの準備を完整するとか、老齡
將校の淘汰又將校の新陳代謝を盛にして、軍隊の實力
を高むると同時に、戦時に有力なる所要の幹部を得る

為、豫後備將校の技能刷新を圖る等の舉に出づるある

四、獨逸の陸軍大擴張と之が列國に及ぼせる反響

獨逸陸軍擴張の實質は、略ぼ上に述べたるが如きものであ
る。此の雄大なる擴張案成立の境は、現時に於ける歐洲中原
の均勢を破るに至るは明瞭である。之が結果として直接
且つ最も甚しき痛痒を感じるものは、無論露佛の兩國であ
る。就中併國に至りては、今や富力餘りあるも、人口増殖の關係
上、現在よりも多数の壯丁を徵集して軍備を擴張する事とを

評さぬ、武力の根元要素たる此丁の最大限を使用し盡して居るの悲境に立ちつつある。故に彼は到底獨逸に對しては、最早兵數に於て全然競争し能はざるの凶地に陥りて居る。さうして何んとか之が對抗策を施さざれば、立國の基礎は動搖を来すの恐がある。最近西電の傳ふる所は依りて多量年採り来り！二年兵役制を止めて三年兵役制を復活し且つ巨費を投じて兵器材料を改新し、以て數に於て破らざる均勢を、軍隊及武器の精銳に依りて補はんと勉めて居る様である。勿論軍隊及武器の精良あることは、用兵上の一大

勢力たるを失はぬ、然るも之を因りて數の不足を補ひ得るは、某程度までである。要するに佛國の採らんとする此の手段は實に窮蹙の策にして、彼をありては外に仕方もあるまい。鮮所事ながら誠と氣の毒千万の感かするではあいか、其の他露國は獨逸の擴張に對抗して六師團(三軍團)、奥國は獨逸との協同確保の御交際^{つきあひ}に二師團(一軍團)の擴張を計畫しあするところ、西電は報して居る、西歐の天地は、今や再び陸軍競争の陰雲を以て蔽はせつつある。獨り英國は此の現象に對し、未だ烈げしき衝動に感觸して居らぬ、係りあから

永く風馬牛我を閑せざる爲に漸まりて居るふとが出来よ
うか、之等は吾輩も甚だ疑問である、抑も獨逸が對英
製艦競争を止めて、陸軍擴張に主力を傾注するに至りし
は、前にも述べた通り、直接の目的は、歐洲中厚に於ける自己
の地位を一層向上せしむるにあるとは無論である、併し未
から暁す之れのみを以て、獨逸が對英争覇の意を根柢
より断念したるものとは思はしめぬ、最近巴爾幹事件の経
過に徴して、獨逸は英の近東問題を對する壓力と執着心
の、従来よりも大に減却したることを驗知した、故に波きの

實力を以て一朝克く露佛を制壓し得るの日は、多年企患
し且つ經營を進めつつある所の、巴爾幹半島より小亞細亞を
經て波斯湾頭に突進し歐亞三大陸を經断せんと欲する宿
圖、今日英國の巴爾幹方面に於ける、實力上より打算して、伊
すしも成就し難き事非ざることを悟つたであらう、彼
等の勢力が波斯湾頭に突出するの日は、地續きより波斯方
面より、英の寶庫たる印度を脅威し、或は蘇士運河を扼し
埃及を抑へて、英の死命を制御し得るに至るべし、決して
幻想ではあるまい、寧ろ海上競争によりて一時英を屠ら

んとする考より、此の方策が却て遂行容易且捷徑と認め
むべき根拠が在りてもない、斯の如き新企圖の實現は、恐ら
く遠き将来を待たぬと思はる、従つて英國なる者が、永く陸
軍競争を、對岸の火災視して居る志が出来ようか、必ず
や彼も亦此の渦中の一泳手なるの、止むを得ざるの日到来
する志とあらむべし。

五、新趨勢に對する帝國の覺悟

千八百七十年普佛戦争後、於ける、独逸カイゼルの陸上角逐
經營は、歐洲大陸諸國として、之をが應酬は煩苛せしめたる、

其の後、概一轉、彼等の對英海上争覇の施設は、世界列國を
一々、其の狂瀾中に投入せしめて、現時の競争を惹起し、無
事の國民として、益々軍費の重荷に呻吟せしむるに至りしが、
今や再轉して、彼等の着眼は、陸上經營の施設に向けらる、歐洲
大陸諸國は、素より、英島國までも、此の新施設に衝動せらる、
て將に陸上競争の洪波を捲き起すに至らんと為しつゝある、
吾人極東に偏在せる帝國民は、武陵桃源の夢を貪りつゝ、
此等狂瀾怒濤の影響を蒙るゝと云ふ、果して無為に
經過し得るの幸福を有するや、否、彼の露國に於ける軍

備擴張は、施設直接の目的は、對獨逸策子外あら^りと
雖、此の建設せらるる軍備も、西方に對する關係緩和し
あるの日は、東亞中亞に對する勢力として使用せらるる^也
領印度埃及等が、獨逸の脅威を蒙るのときは、吾人英帝
國の同盟者として、間接直接に之を救援するの義務を
負擔せねばならぬ、斯の如く觀察し来るとは、歐大陸上に於
ける軍備競争も、第十九世紀末葉に起りし、彼の地の競争
とは趣を異にして、今や吾人は決して遠き對岸の火災視
するあとを得ぬ、以上の形勢を瞥見すきは、恰も世界列國

はカイゼルの心機を中心として、彼の指顧を應じて其の四
周に旋轉活動しつつあるの觀がある蓋し彼も一個の英傑
たるを失はぬは、いか、殊に海軍擴張、師團増設等國防に
關する評論喧囂ある、帝國今日の狀態に於て、吾輩は國
民が此の推移する新趨勢を冷静に觀察達見して、將來に
處する道途に於て、誤りあからんと切望し堪へぬ國民の
發展は、須らく抵抗の必要なき、方面に向はざるべからざる歴史
的法則に反しては、獨逸の精力を以てして、容易に之を
打勝つと出来ずして、今や更に新方案を求むるに餘

儀ありせらるるに至りた、此の邊の消息は實に國防殖民
等の大策決定上熟慮研究を要すべき点である、吾人國民
は將來東方又は南方に發展の地を求めて、**米**獨延び英の
勢力との接觸衝突を辭せざるべきか、或は主として支那
大陸方面に發展して、之を妨害すべき抵抗を打ち勝つよ
とを勉むるを得策とすべきや、實に真面目に講究す
べき重要な問題である、海と隔るる屬地なき限りは、唯漁業と航運のみ海國民の發展は海上に求むべしと
云ふが如き、單に簡たる抽象的理想は、活世界に處して活機
を制するの道に叶ふべしとも思はせぬ、吾輩は今日に

於ける世界軍備趨勢の轉機に際し、國民殊に國防に焦
慮しつつある吾國の士に、感情を走らす、世評を雷同せず、
茲に新趨勢を深く講究觀察して、帝國前途の發展
上に遠算をからしめんことを、切に警告して置きたい、



